

平成23年度文部科学省委託
確かな学力の育成に係る実践的調査研究

新学習指導要領の趣旨を踏まえた 学力向上等の方策に関する調査研究

実践事例集



(中仙小学校 6年 国語)



(北陽小学校 6年 算数)

本調査研究推進地区及び推進校

推進地区	推進校	主な取組内容
男鹿市 (P3)	北陽小学校 (P5)	学びの質を高める手引きに基づいた授業実践
	男鹿北中学校 (P7)	「読解力向上のためのプロセス」を生かした授業づくり
大仙市 (P4)	清水小学校 (P9)	9年間のスパンで育てる「学び方」の指導
	中仙小学校 (P11)	新学習指導要領の趣旨を踏まえた国語科授業改善の推進
	中仙中学校 (P13)	連携を生かした授業研究モデルプラン

平成24年3月

秋田県教育庁義務教育課



本県重点課題

- ① 「活用」に関わる学力の定着
- ② 校種間の連携に基づいた授業の実現
- ③ 教育における検証改善サイクルの確立

1 平成23年の重点課題

(1) 課題設定の理由

「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」は、今年度文部科学省から委託があった「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」のメニューの一つである。

平成19年度から実施された全国学力・学習状況調査の結果において、本県の児童生徒は、4年連続してきわめて良好な状況にある。しかし、文章や資料を読み、自分の考えをもち、それを説明したり資料を活用して適切に判断したり、理由を説明したりする等の問題の正答率が低い傾向がある。そのため、いわゆる「活用」に関する力を一層向上させなければならないと考えている。

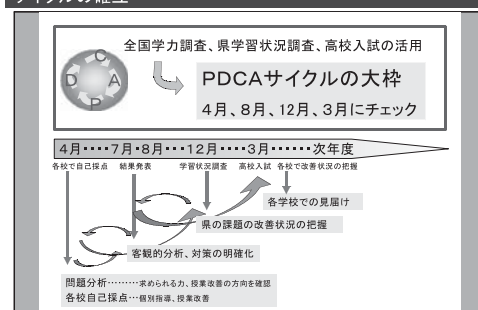
また、県学習状況調査結果や、県教育委員会の指導主事等の学校訪問から、中学校での一層の学力向上が必要であると考えている。具体的には、小学校から中学校にかけて学習意欲が大きく低下することや中学校数学や理科で課題の見られる学年がある。また、小学校から中学校にかけて学力が順調に向上しない地区も見られる。さらに、小学校で育てられてきた学び合いや、思考力・表現力等を育むために行われてきたノート指導などの「学びのスタイル」が、中学校で十分生かされているとは言えない。

一方、小学校においては、教科の専門性や質の高い教科指導など中学校の教育力を活用してほしいと考えている。小学校の教員が各教科で習得した知識及び技能が中学校の学習でどのように生かされるのかを知ることで、小学校の授業改善が一層推進すると考えている。これらを踏まえ、小学校6年間を通して身に付けてきた学習習慣・学習スタイルを中学校でも継続するなど、小学校と中学校の連携を一層深めて授業改善を図り、学習意欲や思考力・表現力等の育成につなげていきたいと考えている。

本県では学力向上のために、全国学力・学習状況調査と県学習状況調査及び高校入試を一体として捉えた検証改善サイクルの確立に向けた取組をしている。具体的には、全国学力・学習状況調査で本県の課題となった問題の類似問題やB問題の趣旨を生かした問題を県学習状況調査において国語や算数・数学のみならず全ての教科で出題し、課題の改善状況を把握している。そして、高校入試では高校の学習を進める上で必要な思考力や判断力、表現力を問う問題を出題し、生徒に身に付けさせたい力や授業改善に向けてのメッセージなどを入試問題を通して発信しているところである。

そこで、本調査研究を全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえて取り組むとともに、より一層学力向上に向けた指導改善を推進していきたいと考え、上の3点を本県の重点課題として設定した。実施するに当たっては、小・中学校の連携については必ず取り組むこととし、課題の改善につなげることとした。

国・県の学力調査及び高校入試を一体としてとらえた検証改善サイクルの確立

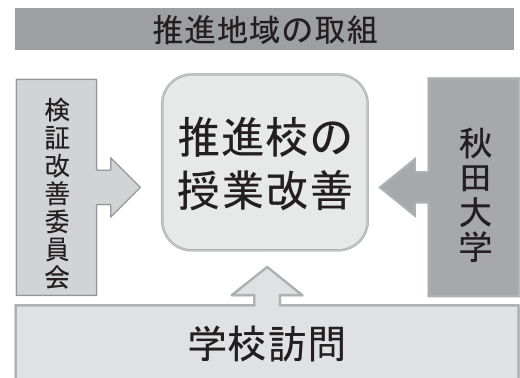


(2) 推進地域の取組

- ① 推進地区及び推進校に本研究の趣旨、県教育委員会としての本研究の進め方等の周知を図るとともに、県教育委員会の指導主事等が、必要に応じて推進校を訪問し、重点課題に係る取組について指導・助言を行う。
- ② 必要に応じて推進地区と秋田大学との連携を充実させ、大学のもつ理論的・専門的教育力

を活用して事業の推進を図る。

- ③ 推進地区及び推進校における教育施策や授業改善等の特色ある取組を、秋田県検証改善委員会に情報提供し指導・助言を受け、より一層事業の充実を図る。
- ④ 秋田県教育研究発表会等において、推進校の成果発表を行うとともに、成果の普及を図る。



2 成果と課題

(1) 成果

- ① 複数の情報を組み合わせて考えたり、自分の考えをまとめて表現したりする学習活動などを継続して取り組んだ推進校では、思考力や表現力などを育む学習活動についての授業改善が進み「活用」に関わる力の向上が見られた。
- ② 各学年及び小・中学校の接続における学びの連続性を重視し、各学年の発達段階に応じた学習習慣の定着を図るため、「小・中9年間のスパンで育てる『学び方』」の指導資料を作成した推進地区では、児童生徒の授業における学習意欲の向上や話し方・聞き方の系統的指導、家庭と連携した家庭学習の習慣化などにつなげることができた。
- ③ 各推進校においては、全国学力・学習状況調査と県学習状況調査を一体として活用した検証改善サイクルを確立することができた。具体的には、全国学力・学習状況調査から自校の課題を把握し、課題改善のための指導や授業改善に取り組む。そして、課題の改善状況を県学習状況調査で検証し、さらに、年度内で補充的指導を行い改善状況を見届ける。また、これらを次年度の計画に反映させる。以上のようなサイクルを推進校の実態に応じて実践した。
- ④ 推進地区の小学校6年生が、合同で秋田大学教授等による出前授業を受講するなど大学の教育力を生かした取組により、子どもたちの教科に対する興味・関心が高まり、学習意欲の喚起につなげることができた。また、秋田大学の教授等を講師として招聘して研修会を開催し、新学習指導要領で求められている授業づくりについて研修することができた。
- ⑤ 関係教育事務所単位で成果発表会を実施したり、学力向上フォーラム（秋田大学との共催）や秋田県教育研究発表会等において発表の機会を設けたりすることにより、県内外への成果の普及に努めた。

(2) 課題

- ① 文章や資料を読み、自分の考えをもち、それを説明する力や、図や資料等を活用して適切に判断したり、その理由を説明したりするなどの「活用」に関する力を一層向上させることについては、引き続き取り組む必要がある。本研究で成果につながった推進校の取組を県のホームページに掲載するなどして広く紹介するとともに、各教科において、思考力・判断力・表現力等を育む学習活動が効果的に行われるよう、学校訪問等を通して授業改善を一層推進したい。
- ② 小・中連携に基づいた授業の実現については、各地区の実態に応じて検討していく必要がある。学習習慣形成に向けた取組や効果的な授業研究会の進め方など、本研究で成果につながった推進地区の取組等を広く紹介していきたい。
- ③ 本県では、国・県の学力調査及び高校入試を一体として捉えた「あきた型検証改善サイクル」の確立に向けた取組をしている。このことについては、特に評価の仕方や改善に関する具体的な手立てなどに工夫が必要である。本研究で成果につながった推進校の取組や「平成22年度学力向上推進事業 実践事例集」、秋田県検証改善委員会による「学校改善支援プラン（H19～H23）」など、計画の段階から評価や改善部分についての指標や手立て等を具体的に示した取組事例等を紹介し、学校訪問や学力向上に係る事業等を通して支援していきたい。

研究主題

基礎・基本の確実な習得と表現力等の育成

男鹿市教育委員会 教育長 杉 本 俊比古

I 推進地区の概要

推進校数	小学校	1 校	中学校	1 校	合 計	2 校
推進校名	男鹿市立北陽小学校, 男鹿市立男鹿北中学校					

1 研究の重点

- (1) 「書くこと」、「読むこと」、「数と計算」等に係る基礎・基本の定着を図る。
- (2) 自分の考えを根拠を明らかにして表現する力を身に付ける。
- (3) 学習習慣の定着を図る。

2 研究の概要

(1) 実施体制

右の図の組織を機能させ、研究体制や取組の方向性等について、市と学校が連携を密にして計画的に進めた。

(2) 運営委員会、授業研究会等における取組

- ① 研究の方向性、検証方法等について助言した。
- ② 研修会後に研究主任と懇談し、研究推進に係る問題点に対する解決の方向性など、研究の進め方について助言した。
- ③ 小・中学校で連携して作成した学習習慣に係る系統表「身に付けさせたい基本的学習習慣」を活用し、子どもが主体的に取り組める手立てを助言した。

(3) 先進校の視察

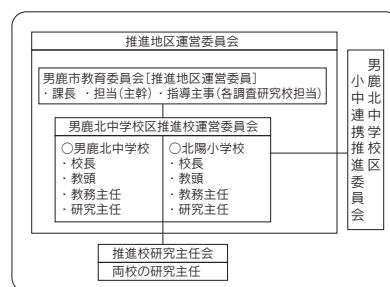
美郷町立千畑南小学校と千畑中学校を視察し、学区としての研究の在り方の参考にした。

(4) 成果の普及

市内全小中学校の研究主任等の参加による「教育課程編成に係る研修会」(H24 年 1 月実施)で成果を発表する場を設定するとともに、学区の保護者へ成果をまとめた便りで情報発信する。

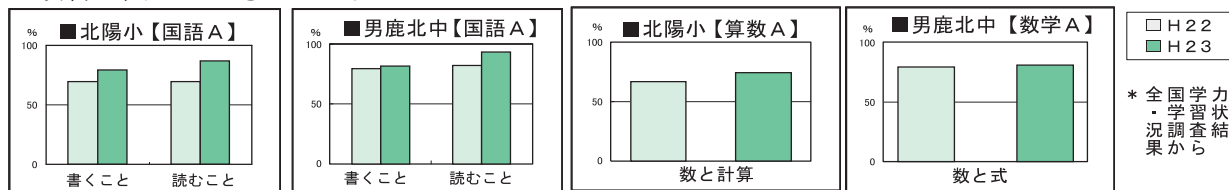
(5) 実践研究の成果等の検証の方策

- ・全国学力・学習状況調査において課題が見られた領域の問題で経年比較した。
- ・「学習習慣アンケート」を実施し、児童生徒の学習時間や計画的な取組を経年比較した。
- ・検証授業や授業研究会を通して、児童生徒の姿で成果を確認した。

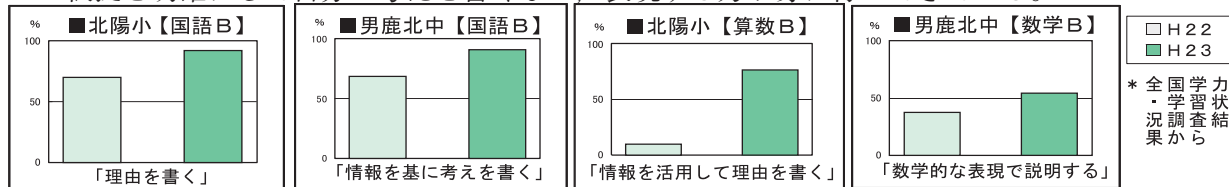


II 学力調査等に見られる成果

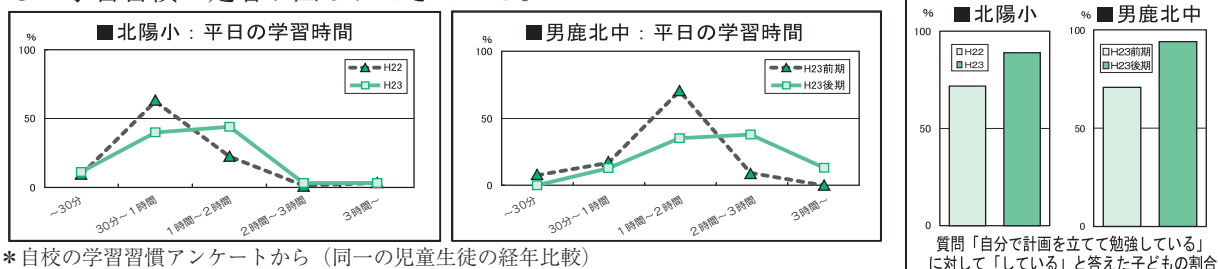
- 1 国語科では「書くこと」「読むこと」、算数・数学科では「数と計算」「数と式」の領域で、改善が図られてきている。



- 2 根拠を明確にして自分の考えを書くなど、表現する力が身に付いてきている。



- 3 学習習慣の定着が図られてきている。



研究主題

教職員と教育委員会が一体となって取り組む学力向上の方策について

大仙市教育委員会 教育長 三 浦 憲 一

I 推進地区の概要

推進校数	小学校	2校	中学校	1校	合 計	3校
推進校名	中仙小学校、清水小学校、中仙中学校					

1 研究の重点

- (1) 児童生徒の関心・意欲を高める授業づくり
- (2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得及び言語活動の充実により、論理的に思考・判断・表現する力の一層の向上を図ること。

2 研究の概要

- (1) 学力向上推進委員会による取組

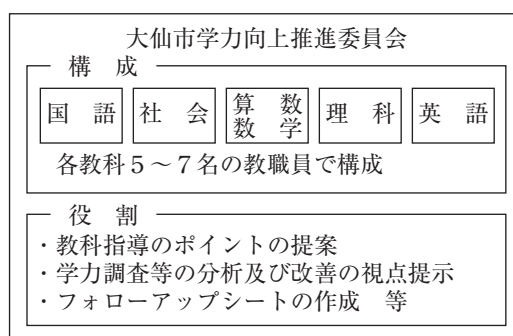
本市では、学習の定着状況の把握・分析及び学力向上施策等を検討するために学力向上推進委員会を設置している。市教職員研究集会における教科指導のポイントの提案や学力調査等の分析、学力調査等の回復指導のためのフォローアップシート作成等、市の教科指導の先導的役割を果たしている。

- (2) 教科等指導研修会の実施

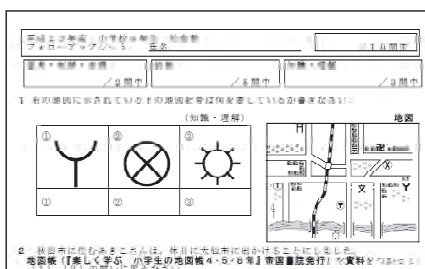
今年度は、市教育研究所が主催し、国語と外国語活動・英語の教科等指導者研修会を実施した。今後年次計画で他教科の研修会を実施していく予定である。

- (3) 市教職員ネットワーク及び教育研究所報による広報活動

本市の教職員が公用パソコンで閲覧できるイントラネット（DEネット）に、学力向上推進委員会が作成した学力調査等の結果と分析、改善に向けての提案やフォローアップシート等をアップし、教職員がいつでも必要な情報を取り出せるようにしている。また、年度末に発行している市教育研究所報には、推進校である中仙小・中学校、清水小学校の取組の他、各中学校区で取り組んでいる特色ある小・中連携の取組を掲載する予定である。



市教職員研究集会において教科指導のポイントについて発表する学力向上推進委員



学力向上推進委員が作成した小学校4年生社会科のフォローアップシート



大仙市教職員ネットワークDEネット

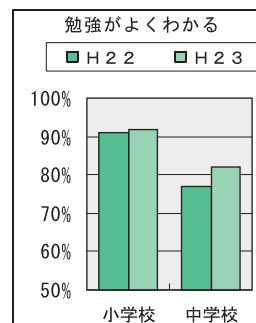
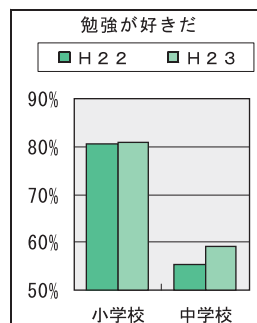
II 学力調査等に見られる成果

- 1 秋田県学習状況調査における成果

平成23年12月に行われた県学習状況調査における各学年教科別平均は中2の1教科を除いて県の平均値を上回ることができた。また、情意面においても「勉強が好きだ」「勉強がよくわかる」などの質問において昨年度に比べ良好な数値結果が出た。特に中学校における伸びが著しい。

- 2 市の教職員研究発表会における成果

市教職員研究集会における学力向上推進委員会の提案内容に関する教職員に対するアンケートでは、全ての教職員が十分満足、まあまあ満足と答えており、その後の授業改善につながったものと考えられる。



秋田県学習状況調査生徒質問紙において「強く思う」「そう思う」と答えた割合

研究主題

学び合いの中から自力解決の力を育む指導 ～算数科における言語活動の充実を通して～

男鹿市立北陽小学校 校長 桐 生 登志夫

I 研究の重点

- (1) 基礎的、基本的な知識・技能の習得及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成に関すること
- (2) 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関すること
- (3) 教育課程に関する自己点検・自己評価、カリキュラム・マネジメントに関すること

II 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

- (1) 筋道立てて考え、数学的に表現する力

(H22 全国学力・学習状況調査 算数B問題から)

他の説明を読み取り解釈したり考えや根拠を説明したりするなど、記述式の問題において正答率が低い。

〈自校における算数B問題で30%以下の問題〉

- 1 (2) 問題や式の解釈・修正
- 4 説明を記述
- 5 (2) 理由を記述
- 6 (2) 判断の理由を記述

- (2) 家庭学習習慣の確立

(H22 全校アンケートから)

ほとんどの子どもが家庭学習に取り組んでいるが、内容を工夫したり、計画的に取り組んだりするまでには至っていない。

〈全校アンケートで「よくしている・している」と答えた割合〉

- ・自分で計画を立てて学習をしている 75%
- ・家で授業の復習をしている 75%
- ・家で苦手教科の勉強をしている 66%

2 成果

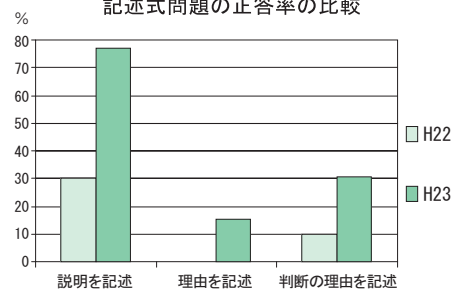
- (1) 筋道立てて考え、数学的に表現する力の向上

教師と子どもが「北陽スタイル」の手引きを活用しながら言語活動を意識した授業を積み重ねることにより、筋道立てて考え、数学的に表現する力が向上してきた。

- (2) 家庭学習習慣の形成

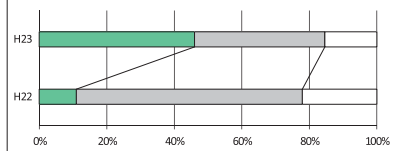
H23 全校アンケートによると、その日の復習や苦手な教科の学習など、自分に必要な学習は何かを考えて内容を工夫し、計画的に取り組む子どもが増えた。学習に取り組む子どもも増えてきた。

全国学力・学習状況調査 算数B問題の
記述式問題の正答率の比較

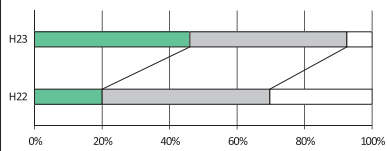


○H23全国学力・学習状況調査 児童質問紙から

算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。

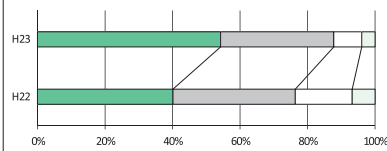


算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考えますか。



○H23全校アンケートから

家で自分で計画を立てて勉強をしている。

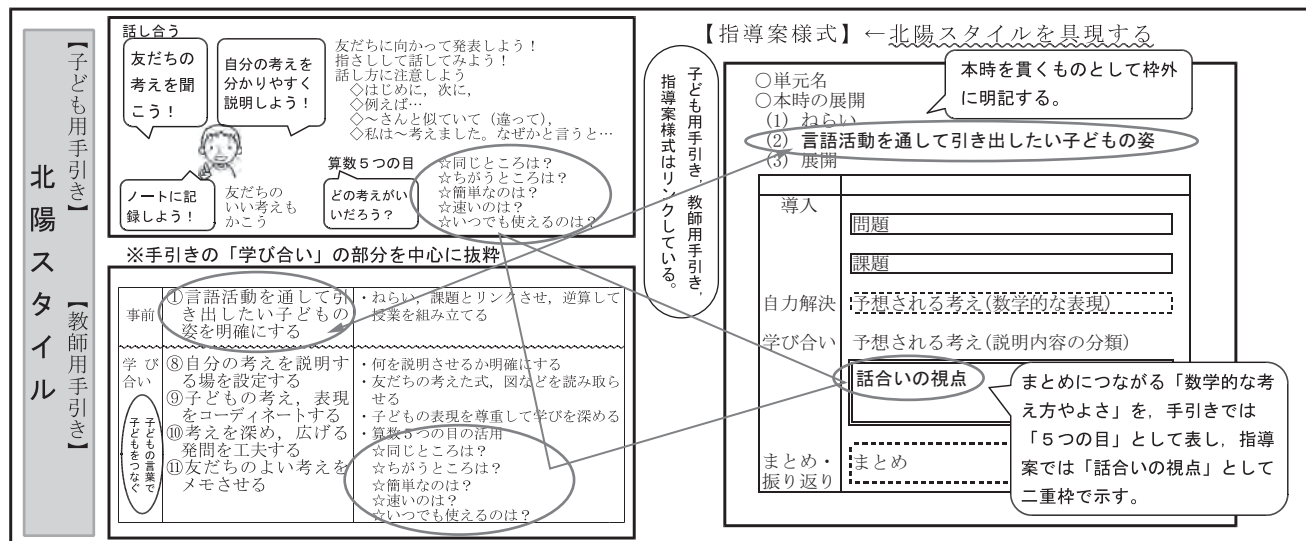


(■ よくしている ■ している ■ あまりしていない ■ していない)

Ⅲ 成果に寄与したと考えられる取組

1 学びの質を高める手引き「北陽スタイル」(子ども用, 教師用)に基づいた授業実践

算数科における言語活動の充実を図り、学びの質を高める授業のポイントを、子ども用と教師用の手引き「北陽スタイル」としてまとめ、日々の授業で活用した。教師用手引きは、授業づくりの初めに「言語活動を通して本時のねらいを達成した子どもの姿」を明らかにすることを掲げ、そこから指導の手立てを具体化するように構成した。



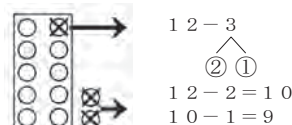
(実践例) 1年「ひきざん」(4/9) 問題: $12 - 3$

ねらい: 十何ー1位数で繰り下がりのある減法の計算の仕方を減減法で考えることができる。

<言語活動を通して本時で引き出したい子どもの姿>【ポイント①】

ブロックを動かしながら、

「まず、引く数の3を2と1に分けます。次に12から2を引いて10です。そして、10から1を引いて9です。だから、答えは9です。」



引き出したい子どもの姿から指導の手立てを具体化

【ポイント⑦】端数2からひくことのよさに気付かせたい
→〔手立て〕減加法も体験させる場をつくらう

【ポイント⑧】ブロック操作と言葉を結び付けて理解を深めたい
→〔手立て〕一人がブロック操作をし一人が説明するペアの活動を取り入れよう

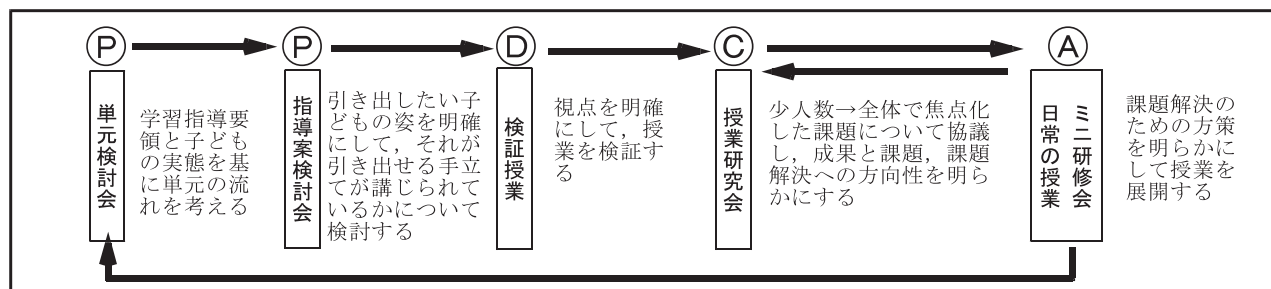


【ポイント⑨】発表の順番をコーディネートしたい
→〔手立て〕子どもの考えを類型化して座席表にチェックしよう

【ポイント⑫】減減法が理解できたかを確認したい
→〔手立て〕評価問題で、ブロックを動かしながら説明する活動を取り入れよう

※ポイントの番号は、教師用手引きの番号にリンクしている。他のポイントについても、同様に手立てを具体化した。

2 授業研究会を中心とした学力向上に向けた検証改善サイクルの確立



上記のサイクルをショートスパンで設定することにより、授業づくりで留意することが明確になり、教師一人一人の授業改善への意識が高まった。

研究主題

意欲を高め、学ぶ力を育てる授業の研究 ～「読解力向上のためのプロセス」を生かした授業づくりを通して～

男鹿市立男鹿北中学校 校長 関 谷 正 人

I 研究の重点

- (1) 基礎的、基本的な知識・技能の習得及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成に関すること
- (2) 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関すること
- (3) 国語科を中核とした各教科等の特質に応じた言語活動の充実に関すること

II 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

〔国語〕

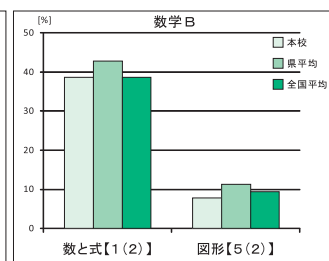
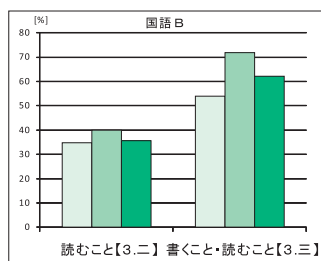
- ・文章の内容や表現の仕方を読み取り、表現を工夫して書く力が不十分である。

〔数学〕

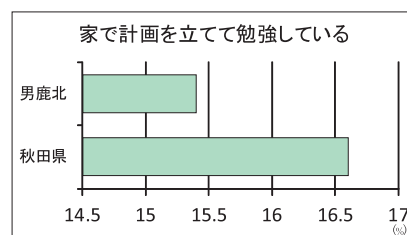
- ・情報を読み取って式を作ることが苦手である。
- ・様々な定理や性質などを適切に活用し、根拠を明らかにして、順序よく整理して考察する力が不足している。

以上の結果から本校の課題を次のようにまとめた。

- ・複数の情報を組み合わせて考えたり、自分の考えをまとめ、表現したりする力が不足している。
- ・基礎的・基本的な学習内容の定着が不十分である。
- ・宿題や復習を計画的に行う学習習慣が形成されていない。



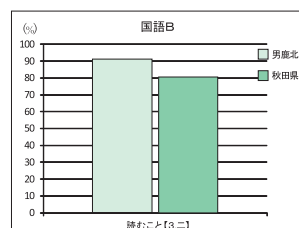
＜H22全国学力・学習状況調査の結果＞



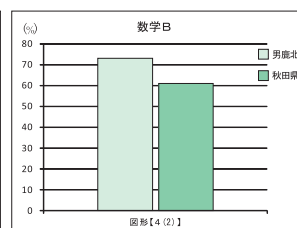
＜H22全国学力・学習状況調査 質問紙調査の結果＞

2 成果

- ・複数の資料等から必要な情報を抜き出し、それらを関連付けながら読み取ることができるようになってきた。（国語）
- ・自分の考えを他の人の考えと比較し、自分の考えを補足しながら、自分の考えをまとめ、言葉や図表等を用いて説明することができるようになってきた。（数学）
- ・計画的に家庭学習を行うようになり、平日、休日の家庭学習の時間にも伸びが見られるようになった。

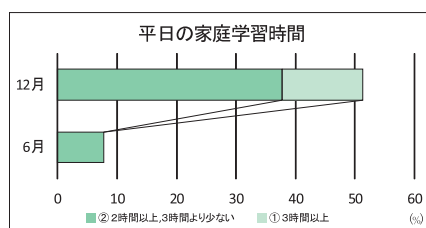


趣旨：必要な情報を探し、関連させながら読む

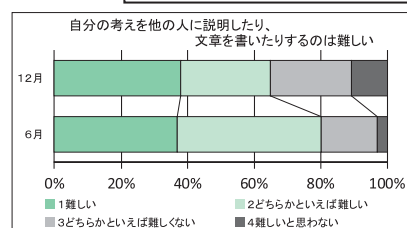


趣旨：与えられた証明を振り返り、類似の場面で証明することができる

＜全国学力・学習状況調査 質問紙調査を6月と12月で全校で実施した結果の比較＞



「平日に2時間以上家庭学習をする生徒の割合」



「自分の考えを他の人に説明したり、文章を書いたりするのは難しい」

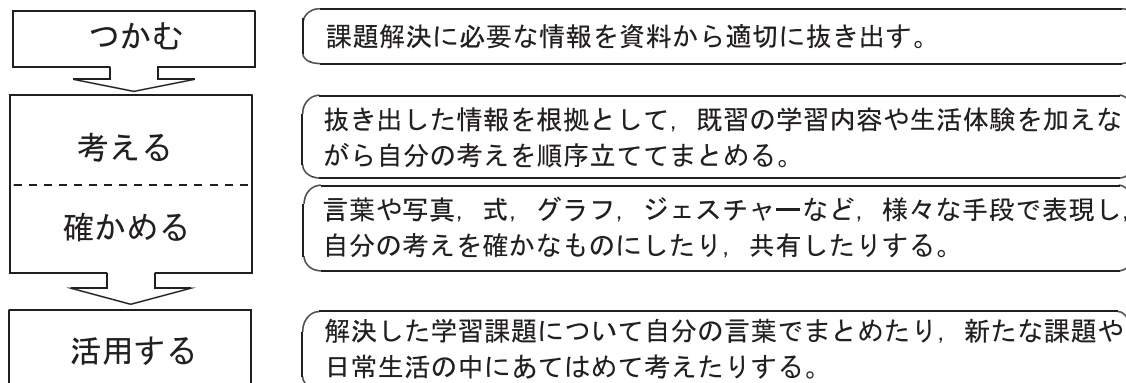
Ⅲ 成果に寄与したと考えられる取組

1 授業改善に関わる取組

(1) 「読解力向上のためのプロセス」を生かした授業づくり

複数の情報等を関連付けて考えたり、自分の考えをまとめ、表現したりする力を育成するために、下図に示すプロセスを考え、全教科で授業改善に取り組んだ。

また、「読解力向上のプロセス」を、具体的な授業のイメージとして捉えることができるようにするために、全教科で指導上の留意点をまとめ、一覧表を作成した。

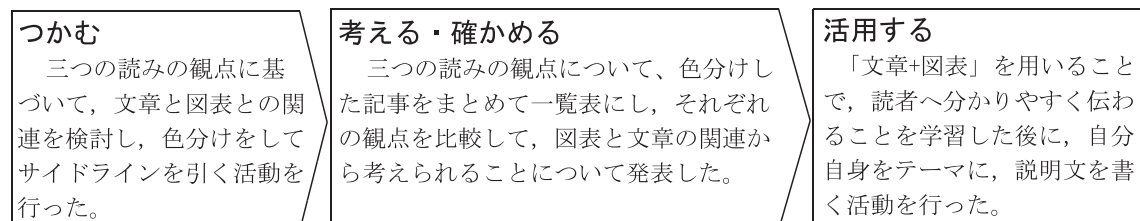


▲読解力向上のためのプロセス

(2) 実践例

第1学年国語科

・単元名 文章と図表との関係を読み解こう ～図表の役割について自分の考えをもつ～



【三つの読みの観点】

- ・文章からも図表からも分かること
- ・文章からしか分からないこと
- ・図表からしか分からないこと

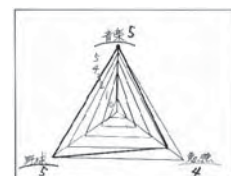
▲三つの読みの観点



▲色分けをし、サイドラインを引く活動



▲観点をまとめた一覧表



▲生徒が書いた説明文

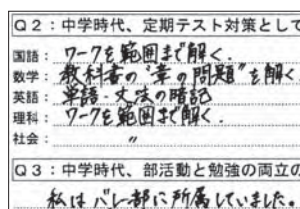
2 小・中連携における家庭学習習慣形成に向けた取組

「身に付けさせたい基本的学習習慣」を基に、学級活動や委員会活動を通して、啓発を図った。

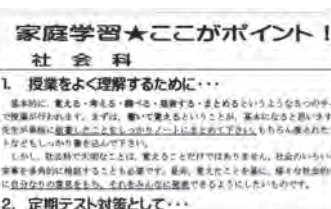
- ・学級活動：卒業生の学習方法の紹介及び、教科担任によるワークやノートの活用についての説明会

- ・委員会活動：「家庭学習ノートコンクール」の実施

生徒が、掲示された家庭学習ノートに、「よい点」や「参考となる点」を付箋に書いて貼る活動



▲先輩からのアドバイス



▲家庭学習のポイント



家庭学習ノートとコメント▶

研究主題

自ら学び、一人一人が輝く子どもの育成 ～伝え合い、学び合う授業づくりから～

大仙市立清水小学校 校長 茂 木 譲

I 研究の重点

- (1) 基礎的、基本的な知識・技能の習得及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成に関すること
- (2) 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関すること
- (3) 全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた、教育指導の充実や学校状況の改善に関すること

II 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

中仙地区では、4月に平成22年度の全国学力・学習状況調査を実施して、その集計結果から本校の課題を次のように見出した。

- ・必要な情報を読み取り、それを用いて表現する力の育成
- ・言語活動の充実による思考力、判断力、表現力等の育成
- ・自ら課題を見つけ、さらに深めようとする意欲の向上

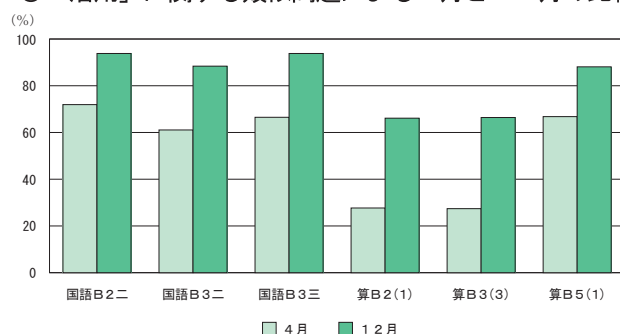
科 目	「知識」に関する問題				「活用」に関する問題					
	国A	算A			国B			算B		
設 問	7	1(3)	1(4)	9(2)	2二	3二	3三	2(1)	3(3)	5(1)
地区平均との比較(%)	-1.0	-2.8	-3.3	-1.2	-11.1	-6.5	-7.4	-2.7	-15.1	-6.0

◎平成23年4月実施の実態調査（平成22年度の全国学力・学習状況調査を活用）

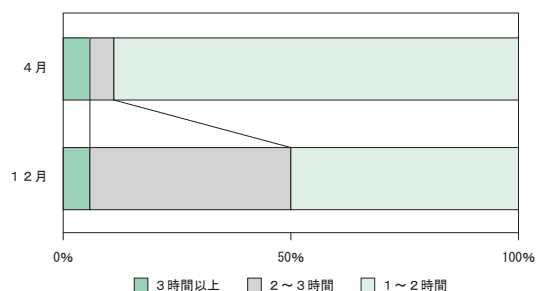
2 成 果

- (1) 基礎的、基本的な知識・技能の習得がより確実になり、これらを活用して課題を解決する力の向上が見られた。
- (2) 家庭との連携を推進することにより、児童の発達の段階に応じた学習習慣の改善が図られた。

◎「活用」に関する類似問題による4月と12月の比較

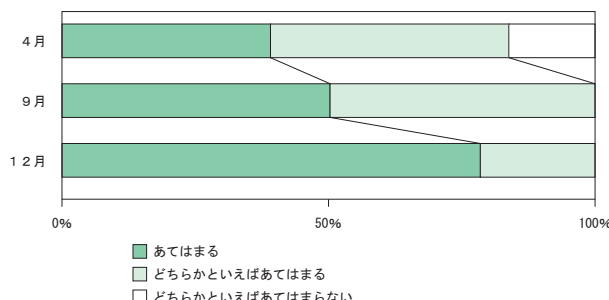


◎平日の家庭学習時間調査【6年】

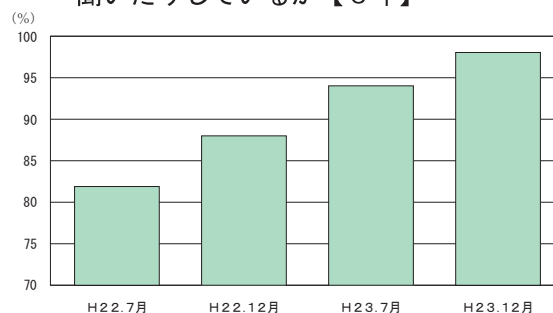


- (3) 中仙地区で授業改善の視点を焦点化したことにより、小・中連携による授業改善が図られた。
- (4) 児童の学習意欲が向上し、主体的に学習に取り組む態度が育成された。

◎授業で自分の考えを発表する機会が与えられているか【6年】



◎しっかり自分の考えを話したり人の話を聞いたりしているか【6年】



研究主題

目的に応じて、「読んで、考え、表現できる」子どもの育成
～中仙モデルを生かした国語科授業の創造～

大仙市立中仙小学校 校長 枝 川 宏 子

I 研究の重点

- (1) 国語科を中核とした各教科等の特質に応じた言語活動の充実に関すること
- (2) 教育課程に関する自己点検・自己評価、カリキュラム・マネジメントに関すること
- (3) 全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた、教育指導の充実や学校状況の改善に関すること

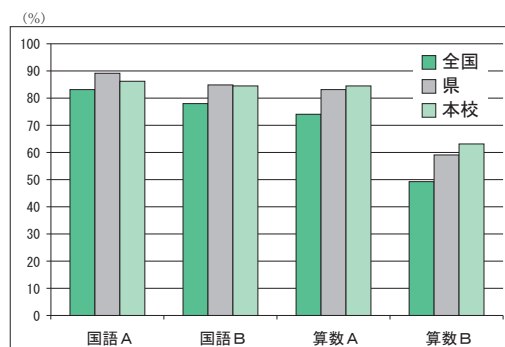
II 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

昨年度の調査結果や研究推進状況から、本校では、算数よりも国語に課題があることが分かった。

特に、次の3点に課題があると捉えた。

- ・ 叙述と関係付けて読み取ること
- ・ 条件に応じて必要な情報を選び、的確に表現すること
- ・ 基礎的・基本的な知識・理解・技能

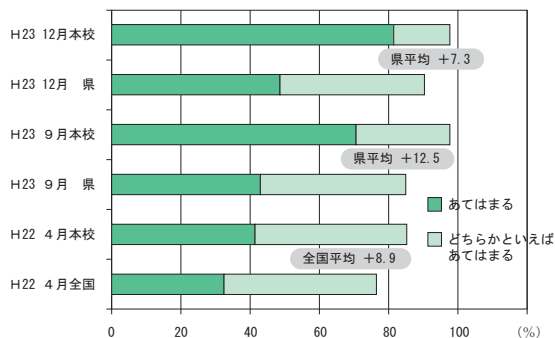


H22全国学力・学習状況調査結果

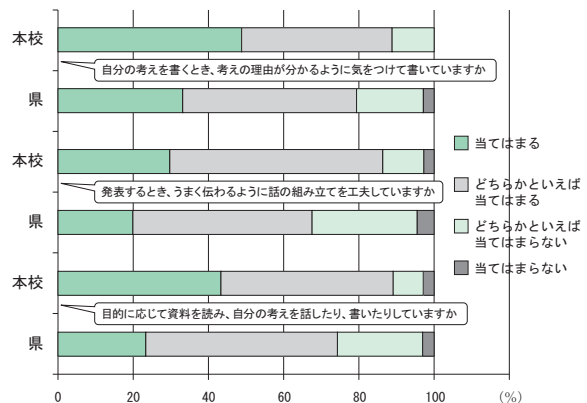
2 成果

○授業改善が図られ、児童の学びへの意識が向上してきている。

普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っている(6年)

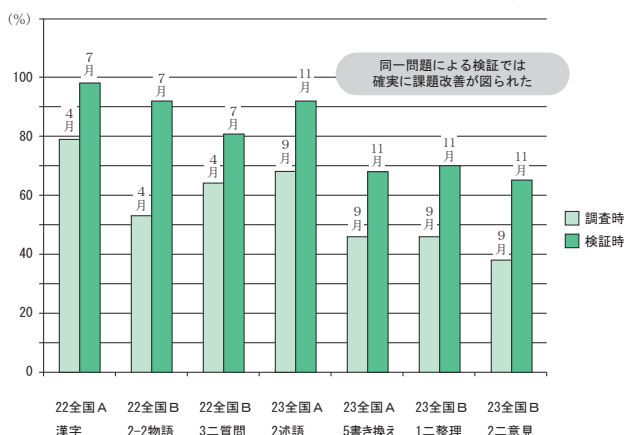


授業での話し合う活動の充実(H22・23全国・県調査質問紙)

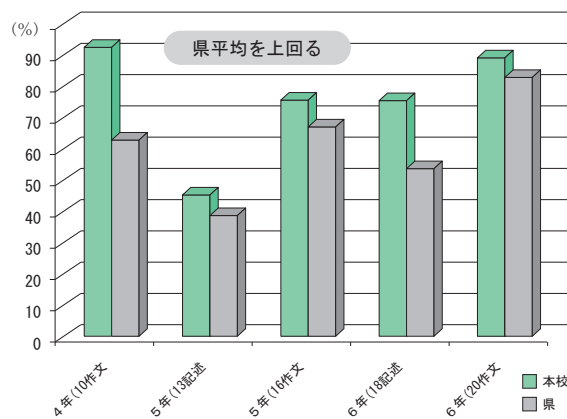


国語学習に対する意識の向上(H23全国調査質問紙)

○PDCAサイクルが有効に機能し、B問題の趣旨を生かした記述問題の正答率も向上してきた。



今年度課題改善状況の検証(H22・23全国調査問題)

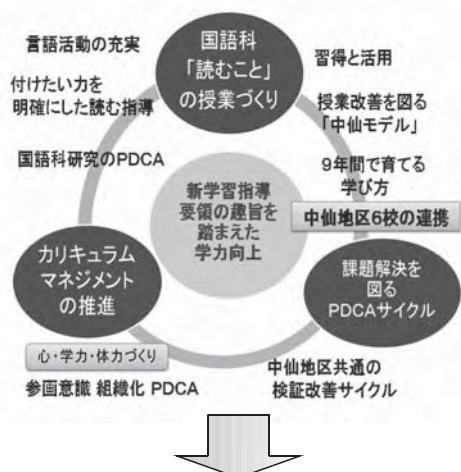


全国B問題の趣旨を生かした問題(H23県調査)

Ⅲ 成果に寄与したと考えられる取組

1 地区連携を基にしたPDCAサイクルの活用

「学力づくり」PDCA計画



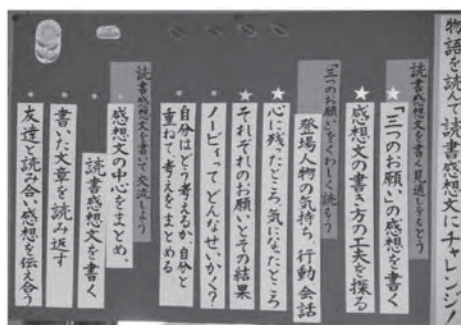
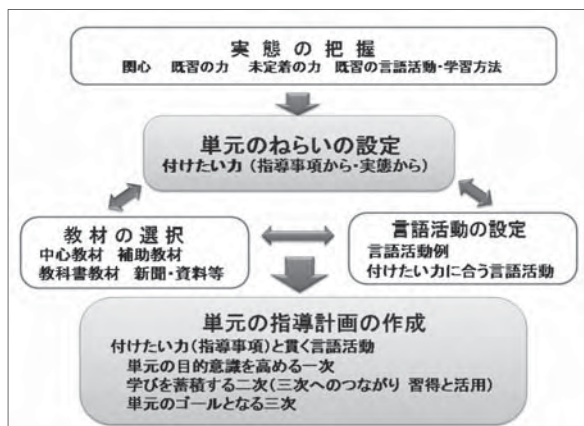
中仙地区共通の検証改善サイクル
 本校のカリキュラム・マネジメント
 「学力づくり」部門のPDCA

国語科研究のPDCA → 国語科指導計画のPDCA → 単元・単位時間のPDCAへ

2 新学習指導要領の趣旨を踏まえた国語科授業改善の推進

(1) 付けたい力を明確にした単元構想

(2) 言語活動の充実



・習得と活用
 ・既習事項の活用
 ・次の単元や次の単元への活用

・言語能力の育成
 ・言語意識の向上

・言語環境の整備
 ・読書活動の推進

- 目標を実現するための言語活動
- 単元を貫き、課題意識を高める言語活動

(3) 授業改善を図る「中仙モデル」国語科の実践

(6年「読むこと」)

単元名 やまなし、わたしはこう読む

<育てたい主な能力> 「C 読むこと」エ 中心教材：「やまなし」(光村図書6年) 関連読書：宮沢賢治作品

<主な言語活動> 作品から読み取ったことを基に、自分の読みをまとめたレポートを書く。

<主な活用> 既習の「対比しながら読む」力を活用して、「やまなし」を読む。

【本時5/8】 <本時のねらい> かわせみやまなしの描写を対比しながら読み、象徴している内容をとらえる。

中仙モデル

①課題意識を高める導入の工夫

- ・本時のゴール(まとめ)に結び付くめあてにする。
- ・ねらい、評価規準との整合性を図る。

②ねらいに迫るための学び合いの充実

- ・既習の力を活用して、自力解決を図る。
- ・個・ペア・グループから、全体の学び合いにつなげる。

③一人一人が学びを実感する終末の工夫

- ・本時の学びをキーワード等を用いて言語化する。
- ・振り返り(自己評価や感想)を次時の学習に生かす。

個からグループで意見交換

- 子どもたちから出された疑問を基に、学習課題を設定
- 対比の読み技を用い、叙述から自力解決 友達と異なる読み取りから、比較検討 グループ・全体での学び合いへ
- 自分の言葉でのまとめ 三次のレポートへのつながり

学び合いから自分の言葉でノートづくり

研究主題

生徒の確かな学力を高め、豊かな人間性を育む指導の工夫
～継続的な検証改善サイクルの確立を目指して～

大仙市立中仙中学校 校長 田 仲 誠 祐

I 研究の重点

- (1) 基礎的、基本的な知識・技能の習得及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成に関する事
- (2) 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関する事
- (3) 全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた、教育指導の充実や学校状況の改善に関する事

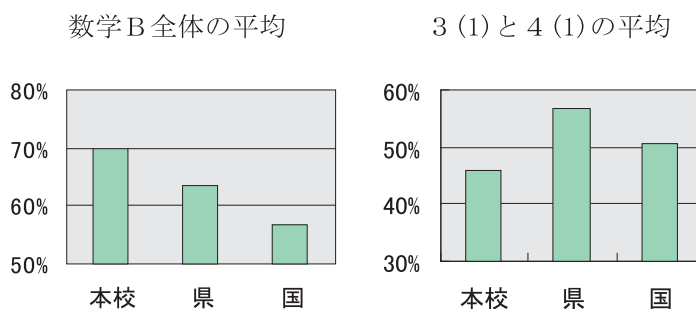
II 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

- 基礎的、基本的な知識や技能が十分に身に付いていない
- 自分の考えをもち、根拠を基に筋道を立てて説明する力が十分でない
- 主体的に学習に取り組む態度が十分に高まっていない

H21全国調査を用いて課題を把握した。数学B問題全体の平均は、全県平均・全国平均をともに上回るものの、「説明する力」を問う3(1)と4(1)の平均はともに下回る。

【H21全国調査数学B問題】

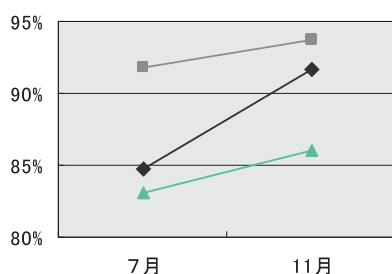


2 成果

データから読み取る生徒の変容（H22全国調査質問紙より抜粋）

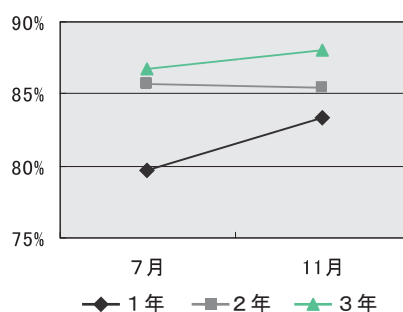
授業への意識の改善

授業で、自分の考えを発表する機会が与えられている



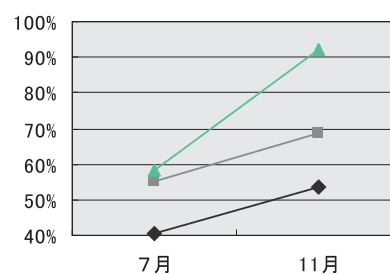
向上心をもって努力

難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している



自主的学習の定着

休日の勉強時間（塾、家庭教師も含む）が2時間以上

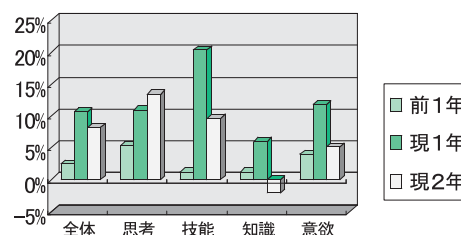


【H23県学習状況調査】

5教科の成績
【通過率の県平均との差】
5教科合計で
・中1は、小6時より
8.5ポイント向上
・中2は、中1時より
10.0ポイント向上

学習意欲
【「大好き・好き」の割合】
県平均を5ポイント
(10ポイント)以上上回る教科
・中1は、6教科(4教科)
・中2は、5教科(2教科)

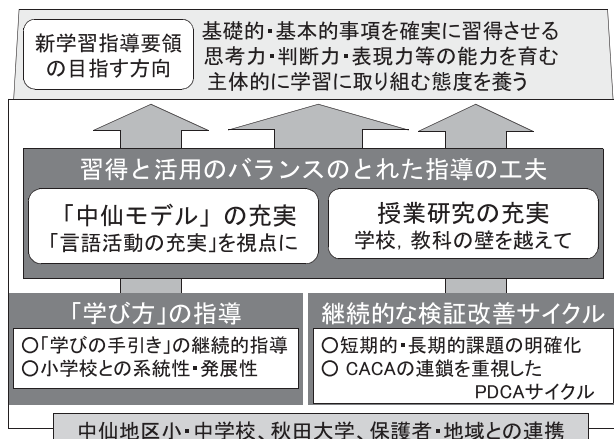
H23県学習状況調査社会科の例



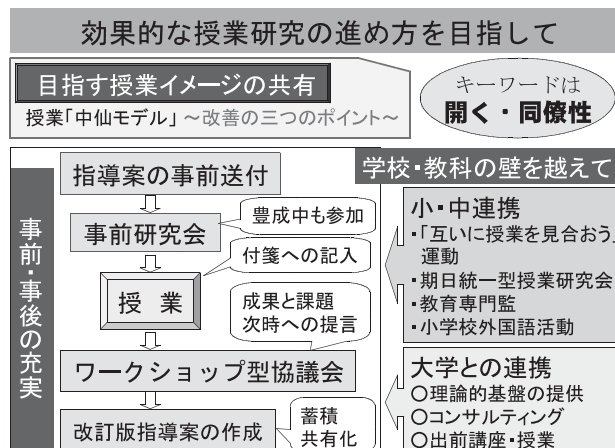
Ⅲ 成果に寄与したと考えられる取組

1 研究の構想

(1) 三つの柱で研究推進

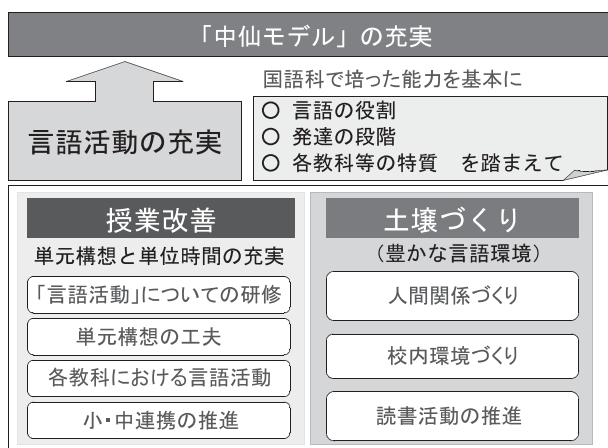


(2) 連携を生かした授業研究モデルプラン



2 授業改善プラン「中仙モデル」の充実

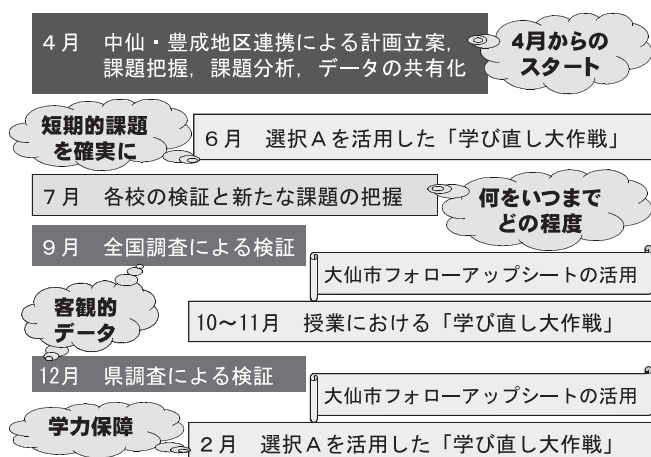
(1) 二つの柱で「言語活動の充実」



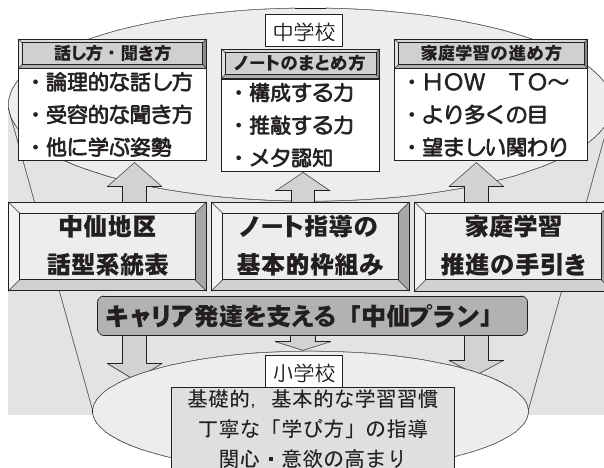
(2) 「言語活動の充実」の鍵は課題意識〈問い〉

	習得と活用	「中仙モデル」の三つのポイント	「中仙モデル」実現の手立てと考えられる「言語活動」
導入	既習事項を活用して課題を整理	課題を子どもが自分のものとして捉えることのできる導入の工夫	本時の課題を焦点化するための言語活動 疑問や願い
展開	既習事項を総合的に関連付けながら問題解決	ねらいに迫るための学び合いの充実(今年度の重点)	授業における二段階思考 本時の核心に焦点化する発問や問い
終末	習得した内容を適用	集団の学びを個に返し、一人一人が学習を実感する終末の工夫	学習成果を明確化する言語活動 言語化が不可欠

3 継続的な検証改善サイクルの確立



4 9年間のスパンで育てる「学び方」の指導





(男鹿北中学校 1年 国語)



(中仙地区 大学連携)

《学校改善支援プラン(全国学力・学習状況調査報告書)と併せて活用してください》

秋田県検証改善委員会では、平成19年度から毎年「学校改善支援プラン」を発行しています。その中で、学力向上に係る特色ある取組を紹介していますので、本実践事例集と併せて活用してください。

なお、「学校改善支援プラン」は、「美の国あきたネット (<http://www.pref.akita.lg.jp>)」及び「学力向上支援 Web」から、ダウンロードすることができます。